

2008年2月26日

朝日新聞社
代表取締役社長 秋山耿太郎 殿
大阪本社代表 池内 文雄 殿

社団法人日本建築学会 近畿支部
支部長 渡邊 史夫

朝日ビルディングおよび新朝日ビルディング保存要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては、多大のご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、今般、朝日ビルディング、および新朝日ビルディングの建て替えを計画しておられるとの記事を拝読いたしました。

1920年代以降、建築は、形態においては装飾を排除して幾何学的な単純さを志向し、建築観においては合理性・機能性を重視し、技術的には鉄筋コンクリート構造・鉄骨構造の特徴を活かそうとする特徴を示しはじめます。それまで西洋建築の根本にあった歴史様式を離れて、全く新しい相貌を呈していくこととなります。この潮流は、今日一般にモダニズム建築と総称されています。モダニズム建築は、太平洋戦争後は建築界の主流となります。現代の建築もほとんどがモダニズムを基調としているといつてよいでしょう。

朝日ビルディングは、日本のモダニズムの開幕を告げる作品として、完成当初から建築界の注目を集めました。また、新朝日ビルは、日本が戦後復興期から高度成長に向かうなか、モダニズム建築が定着し、充実していく過程をよく体現しています。

私ども日本建築学会近畿支部は、2001年に、日本のモダニズム建築が何をめざし、何を達成したかを考えるために、「関西のモダニズム20選」を選定いたしました。そこにおいて、上記のような両建築の歴史的 position を評価し、ともに選出いたしております。

また、2003年にはDOCOMOMO(二十世紀の近代建築に歴史的価値を認め、それに関わる建物や史料の保存の意義を訴えることを目的とした国際組織)の日本支部により、朝日ビルディングが日本のモダニズム建築を代表する100の現存建築の一つに選ばれております。

以上のことから、貴社におかれましては、朝日ビルディングおよび新朝日ビルディングの文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が長く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。なお、本会はこの建物の保存に関して、できうるかぎり協力させていただく所存であることを申し添えます。

2008年2月26日

社団法人日本建築学会近畿支部
近代建築部会
主査 橋寺知子

朝日ビルディングおよび新朝日ビルディングに関する見解

朝日ビルディングは、大阪市北区中之島三丁目に位置する。1931年(昭和6)に竹中工務店の設計施工によって完成した。鉄筋コンクリート10階建てで、建築面積は1,300平方メートル、延床面積は14,945平方メートルである。

地上10階、軒高35メートルという多層階建築であること、外装材にアルミ、ステンレスの金属パネルを大量に用いたこと、ガラス張りの階段室や艦橋を連想させる航空標識塔といった大胆な意匠を徹底したことから、竣工時には「日本で最もセンセーショナルな建物」と評された。その後、改修を重ねているが、外観はなお当初の面影をよくとどめる。

モダニズム建築は1920年代にヨーロッパでその理念と造形が形成された。日本の建築界においても「新興建築」「合理主義建築」として、さまざまな試行がなされていき、戦後の開花を準備する。朝日ビルディングは、その中でも際だって前衛的な造形を示すもので、日本のモダニズム建築開拓の軌跡をたどる上で逸することのできない存在である。

設計を担当したのは石川純一郎(1897～1987)である。石川は当朝日ビルディングで新興建築家の旗手的存在となる。その後も《大阪朝日新聞社京都支局》(1935)では全面ガラスと大壁画、《同名古屋支局》(1937)ではガラスブロックと、大胆な手法に挑戦している。

新朝日ビルディングは、朝日ビルと四つ橋筋をはさんで東側に位置する。この建物は1958年(昭和33)に竹中工務店の設計施工によって竣工した。鉄骨鉄筋コンクリート13階建て、軒高45メートルはこの時期では日本最高であった。規模においても建築面積8,153平方メートル、延床面積75,786平方メートルに達し、戦後最大規模と謳われた。

建築としての特徴は、まずオフィスビル、ホテル、ホール、放送局など複合的な機能を一体化し、都市文化の発信地としての役割を果たしてきたことである。各階にめぐらされた庇と外壁面のアルミパネルも重要である。庇の目的は、雨が多く、夏暑い日本の自然条件を考慮して、日射の制御と補修・清掃をしやすくすることにあった。また、外壁面のアルミのプレス・パネルは、デザインの陳腐化を防ぐために交換が容易な工法を目指したものである。こうした技術的な狙いが新鮮な意匠に結びついているところに、設計担当者・小川正の力量がうかがえる。また、フェスティバル・ホールの壁画は大きな反響を呼んだもので、中之島地区の景観形成要素として広く親しまれている。

1950年代後半から60年代前半は、モダニズムのデザインが、それまでの模索と提案の時代から、工業化の推進や大衆性の向上を目指して新たな展開を遂げていく時代であったといえるが、その潮流の典型的作品と位置づけることができる。

さらに四つ橋筋の両側に、金属パネルを外装材とする二建築が向かい合う斬新な都市景観を生んでいることも見逃せない。

以上、朝日ビルディング、新朝日ビルディングの建築的・文化的価値がまことに高いものであることを申し上げる次第である。

朝日ビルディング



新朝日ビルディング

